

A 178 日米大学生の食物摂取パターンの多変量解析  
鳥取大教育 大塚 譲

目的 食事が健康に強い影響をおよぼすことは明らかであるが、その食行動の要因については十分に検討されていない。豊川らは食品群別摂取量を用いて日本人の食物摂取の因子分析を行なつたが、 $\lambda_1$  因子、 $\lambda_2$  因子共、不明の因子が抽出されたと報告している。そこで鳥取大学およびミシガン大学において行なつた食生活調査のデータを用いて、食品群別摂取頻度によるクラスター分析、因子分析を行ない、日本人、アメリカ人の食行動を比較することを目的とした。

方法 対象は鳥取大学学生183名、アメリカ合衆国ミシガン大学生67名であった。質問用紙を配布し、2日間の食事の内容を記入してもらい、回収した。記された食事の内容を20の食品群に分類し、各食毎の、および1日の摂取頻度を計算し、以下の分析に用いた。

結果 1日の食品群別摂取頻度を用いて、クラスター分析を行なつた結果、大きく2つのグループに調査対象が別れていることが明らかとなった。1つのグループは日本人学生のオゴ構成されており、和風の食事構成のもので考えられた。他のグループはアメリカ人と日本人両方の学生で構成されており欧米風の食事構成をもつもので考えられた。因子分析の結果、固有値1以上のものが7因子抽出され、バリマックス回転後、 $\lambda_1$  因子は、肉+野菜、 $\lambda_2$  因子は豆+海藻類、以下調味料、魚、菓子+嗜好飲料、雑食+牛乳+果物、穀物類とそれぞれ相関が高かつた。この結果 $\lambda_1$  因子は栄養価、 $\lambda_2$  因子は日本風、 $\lambda_5$  因子は間食、 $\lambda_6$  因子はアメリカ風という因子であると推定した。